

資料紹介

「劇 病中偶感」

解題

すでに多くの草稿を紹介しているように、江戸川乱歩は、若き日の資料を整理して保存していた。

今回紹介するのは、「劇 病中偶感」と題された資料である。

この原稿は、乱歩が初期資料を入れていた大型の封筒のうち「EXTRA ORDINARY」と分類されたものに収められていた。同時期の資料としては「恐ろしき錯誤」草稿などが、同じ封筒で保存してあった。

乱歩の作成したスクラップブック「貼雑年譜」では、大正九年〜大正十三年がひとつの期間としてまとまっている。この間「大阪時事新報記者」、「日本文人倶楽部書記長」、「郊北化学研究所支配人」、「弁護士事務所手伝」、「大阪毎日新聞広告部員」という職に就いている。数え年で二十七歳から三十一歳である。

乱歩は大正十一年二月に、郊北化学研究所支配人の職に就き、池袋に転居している。乱歩は後半生を池袋で過ごすことになるのだが、それ以前に、若き日の数か月を池袋で過ごしていたのである。

「貼雑年譜」には「東京市外池袋八六六（豊島師範前通駅に向って右側路地の奥）家賃三十円」と、間取り図と共に記録されている。貼られている転居通知には「池袋驛より豊島師範に向って左側 寫眞屋の裏、驛より三分の一丁計り」とある。現在の池袋駅から西口公園の辺りだと思われる。

名刺には「香粧品薬品類製造販売 庄司商行 平井太郎」とある。「東京市外池袋一三六七番地」となっている。これは立教大学の南側にあたる。

この研究所は、ポマードの製造をしていて、乱歩は瓶の意匠から各種宣伝印刷物などを考案したりしたようである。

「貼雑年譜」の記述によると、「資本金案外薄弱デ」、給料の支払いが滞っている。大阪では、守口町の父の家に住むことになる。ここで乱歩は、デビュー作である「二銭銅貨」を書いたのだ。九月二十六日から数日の間、と乱歩は記録している。

今回ここで紹介する「劇 病中偶感」は、一枚目に記述があるように、大正

十一年三月四日に書かれたものらしい。つまり、デビュー作「二銭銅貨」の直前、池袋に住んでいた頃に書かれたものということになる。

この原稿は「貼雑年譜」では「幻想劇」「病中偶感」草稿」となっている。原稿には「舞踊劇」と記されている。しかし、読んでいくとわかるように、劇として整ったものであるとはいい難いものである。

この劇の第一幕には主として三人の人物が登場する。公子という女と、弟の次郎、そして彼らの母である。病で寝ている次郎は、姉が近寄ることをうとましく感じ、きつく当たる。それを聞いた母は次郎をたしなめるが、そこに何か秘密があることが暗示される。というのが、ここで描かれる物語である。

この公子という女と、踊る女がどういう関係であるのかは書かれていないが、一人二役であったり、酷似する二人であったりといった展開が想像できる。また、母親がほめかす、出生の秘密のようなものは、のちに書かれることになる。乱歩の長編小説に多く見られるモチーフである。さらに、次郎が最後に見せる笑いもまた特徴的である。

「劇 病中偶感」は、十分に練られたものとは言えないが、このように、のちに乱歩が小説で描き出すものへとつながるようないくつの特徴を持った原稿だと考えられるのではないか。

落合教幸（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員）

翻刻

「劇 病中偶感」

大正十一年三月四日 ■ 下書

劇 病中偶感

太郎

条件 この劇は全体の半分「迄」程か舞踊であるから、女主人公に扮装する女優は舞踊の名手でなければならぬ。

時 現代

所 都会「の」に於ける。「貧しいといふ程でもない」中流、「寧ろ以下」の勤人の家庭。「に於ける日常茶■飯の出来事」

人 踊る女 公子と同じ女優

白井公子（二十一才）「未婚」出

戻り

全 次郎（十九才）学生

全 志げ子（四十才）右両人の母

女中

「幕が開くと舞」

メランコリックなそれであることななく蠱惑的な神聖をかきむしる様な静かなオーケストラが暫く続いて幕が開く。オーケストラはそのまゝ、續く

舞台は一面の暗黒、その中央に只一点の光るものが踊つてゐる。それが踊る女である。丈高く、豊満な蠱惑「的」な肉体の女、只一枚の薄い寛■潤な衣

「絹」を纏ふ。その衣は薄絹の表面■

一面に銀の鱗を並べた様なもので、前、左、右の三方から強烈な青色の光線を投げると、踊るに随つて蛇の鱗の様に艶めかしく、物凄く光る。

舞踊は矢張り蛇の踊りといった感じのものではなければならぬ。始めはゆるやかな「ステ」普通のステージダンスであるが、看物が、その正常さに厭きて来る頃から、常規を失した狂的の舞踊に変わる。「なので」充分に嬌態を演じて、大いに肉慾を挑発する程、この劇の効果が増すのである。「少くも」二十分位はこの舞踊を續け度い。

オーケストラは勿論その間適当な伴奏をつけねばならぬ。以上の外は凡て、「舞台監督が」この劇全体の感じを現すに適當と思ふ様に工風して貰い度い。

舞踊が一度り済むと舞台は極めて徐々

に明るくなり始める。完全に明るくなるまでに少くも一分「間」は費して欲しい。

明るくなった舞台は■「黒い」カーテンで「小さく」区切られた、六畳位の感じのする、■「離れ座敷」である。廊下などは劇の効果の上から態とはぶく。普通の舞台の様に軒だとか縁側だとかをつけないで、六畳の間を「前面」一柱の所から眞直ぐに切り下した様に見せる。

上手の壁には窓が開いて障子が閉つてゐる。正面は■「床の間と■押入れ、床の間には一寸立派な本箱に金文字の背表紙が光つてゐる。その傍に机も置いてある

隅に衣桁が在り、一二枚衣類がかけてある。下手の壁には前方に半間の出入口があり。茶室風の襖が閉つてゐる。

上手によつて夜具が布かれ、前方に顔を見せて次郎が寝てゐる。氷嚢が頭へのせられてある。その側に公子がうつむいて新聞を読みふけてゐる。次郎は軽微な肺病患者、変態性欲の持主、学校を休んで養生の体、公子は平凡な併しどこか下品な娼婦的な所のある、■「豊満な肉体の持主」顔は余り美しくない。

注意すべきことは「踊る女と同一人物

といふことがすぐ分る様な扮装でなければならぬ。ことである」

舞台が半ば明るくなる頃から次郎は物凄いいり声を発する。公子は次郎の夜着に手をかけてゆり■覺す。次郎の意識が明瞭になると同時に舞台も明るくなり切る。

公「次郎さん、どうかしたの、え？」

と次郎の顔をのぞき込む様にする。

次 暫く無言の後漸く意識が回復した様な声で

「姉さん、こゝに居たのかい」

公「え、さうよ■。あなた、何だか大変うなされて、よ。■夢を見たの？」

暫し沈黙が續く、次郎は姉の顔を厭悪に耐えぬ様に横目でにらんでゐる。

次「姉さんは僕の部屋へ来ちやいけないつていつたぢやないか。早く出て行つて下さい。」

公「そんな事云ふもんぢやなくつてよ。姉さんは次郎さんの御介抱に来たんぢやありませんか。」

次「僕は子供ぢやないんだ。「そんな」下らないこと云はないで下さい。」

沈黙 次郎起き上る

次「早く行つて下さい。」

「公子黙って涙ぐんでゐる。」

公■腹立ちに涙ぐんで

「次郎さんはなぜそんなに私を嫌ふの」

次■何とも云へぬ厭悪の情にうろ／＼乍ら「何んでもいい、から早く。うるさい■」

公■泣き度いのを辛抱し乍ら「うるさいですつて、それやあんまりだは、「何が気に入らなくて」何のうらみがあつてそんなひどいことをいふの、いくら次郎さんだつて、その訳を聞かなかや私承知しないわ、さ、いつて御覽なさい、さあ」

と涙声になる。

次「いつもいつてるぢやないか。」

ア、苦しい」

姉がそれでもじつと■自分を見つめて

涙ぐんでゐるのを見るともうたまらなくなり、そはにあつた薬瓶を取つて公子の顔になげつける。瓶は公子の■そむけた顔をかすめて後ろの壁に当りみ

じんにくだけける。「公子の顔にかすり傷が出来て血が少し計り出る」公子は

かすり傷を負つて「アレツ」といつて夢中で部屋の外へ逃げ出す。「次「出

戻りぬさまを見ろ」次郎は姉の去つ

たあとを釘づけにされた様に見入つて

ゐる。

舞台は又徐々に暗くなる。「静かな」

沈鬱な而かも」狂的なオーケストラが始まる。先の踊る女が舞台を縦横にかけ回つて傷つた蛇を思はせる様な曲線の舞踊をやる。

「衣装ののどからも、にかけて太い血の色の線が入つてゐる」

四五分間■で再び舞台は徐々に明るくなる。次郎は之の姿勢で出入口の方を見つめた儘である。

漸く正気づいた様に「チエツ 俺はどうとしたといふのだ。馬鹿な」と独言ち

「次郎だまつて■横になり」うつ

ぶせにな「り」つて、枕の上に両手を組「んで」み、その上にあごをのせ正面を見つめてゐる。

そこへ母のしげ子が入つて来る。

し「お前はまあ、どうしたといふのです。」次郎沈黙

し「次郎、お前は、いくら病氣だからつて、毎日／＼姉さんをいぢめるつて、毎日／＼あんな傷までこしらへて了つ

て、姉さんは「泣き乍ら」松村さんへ手当に行きましたよ。」

次郎沈黙

し「なぜ黙つてゐるのです」涙声にな

る

「お前は知るまいか、私は間に入つて

どんなに苦勞してゐるか、こんなことがあつては私は義理が立ちません。お前も少し私の心を察しておとなしくして呉れなくつちや困つて了ふじやありませんか」

次郎話の半ばから吃驚した様に起上り

■「しげ子」の方を「向いて」向いて、「言葉せはしく問い掛ける」「しはらくして」はけしい眼で「しげ子」を見つ

めながら「てゐる。」「から」低いしかも太い声で

言葉せはしく「義理ですつて」

次「お母さん、あなたは僕等に永い間かくしてゐたんですね」

と「しげ子の顔を」のぞき込む様にする。しげ子はギョツと「して」する、云つてはならぬことを口走つたといふ

体で、話を他に■そらさうとどぎまぎする。

次郎は尚じつとしげ子を見つめてゐる。

そこへあわたゞしく女中が入り来り居の上から

女■「アノ、奥様、旦那様が御呼びで

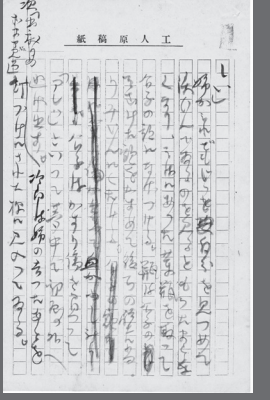
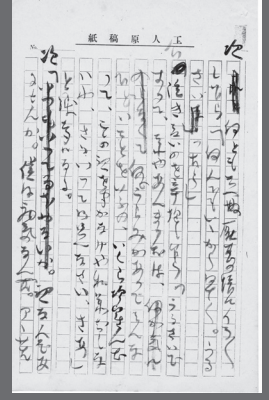
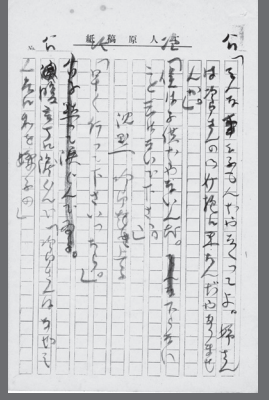
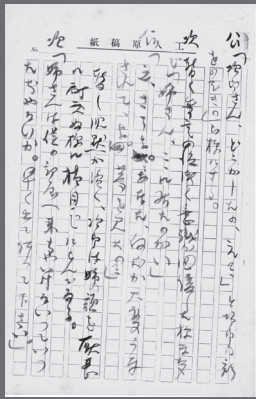
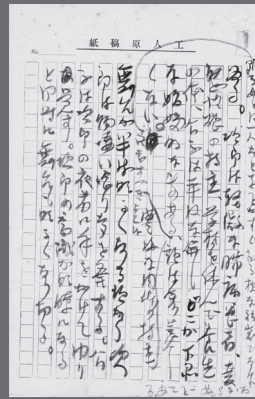
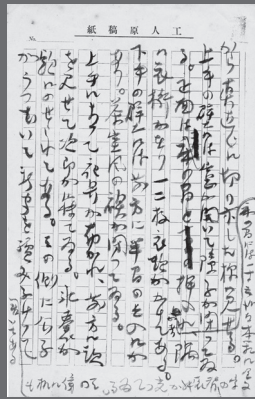
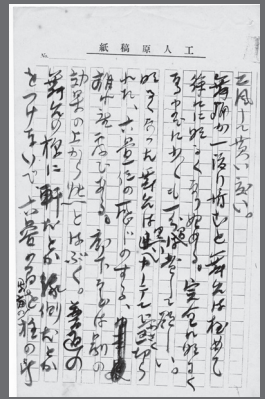
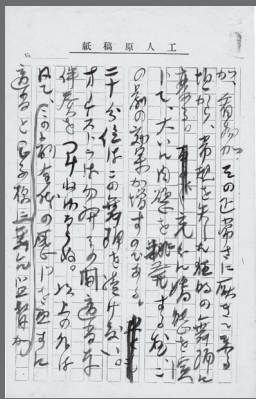
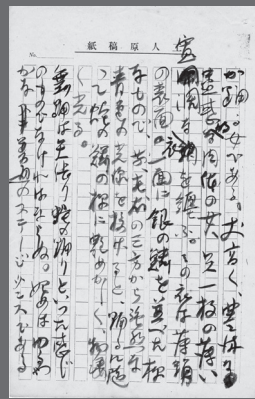
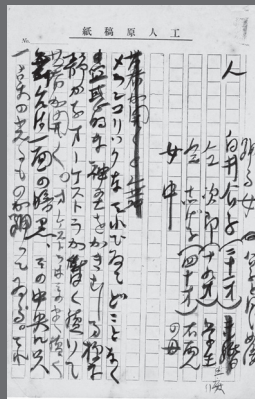
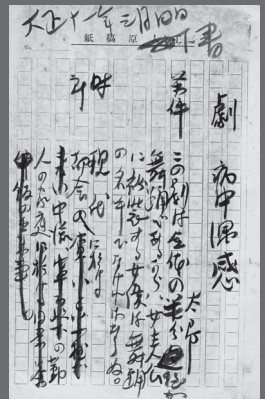
ムいます」

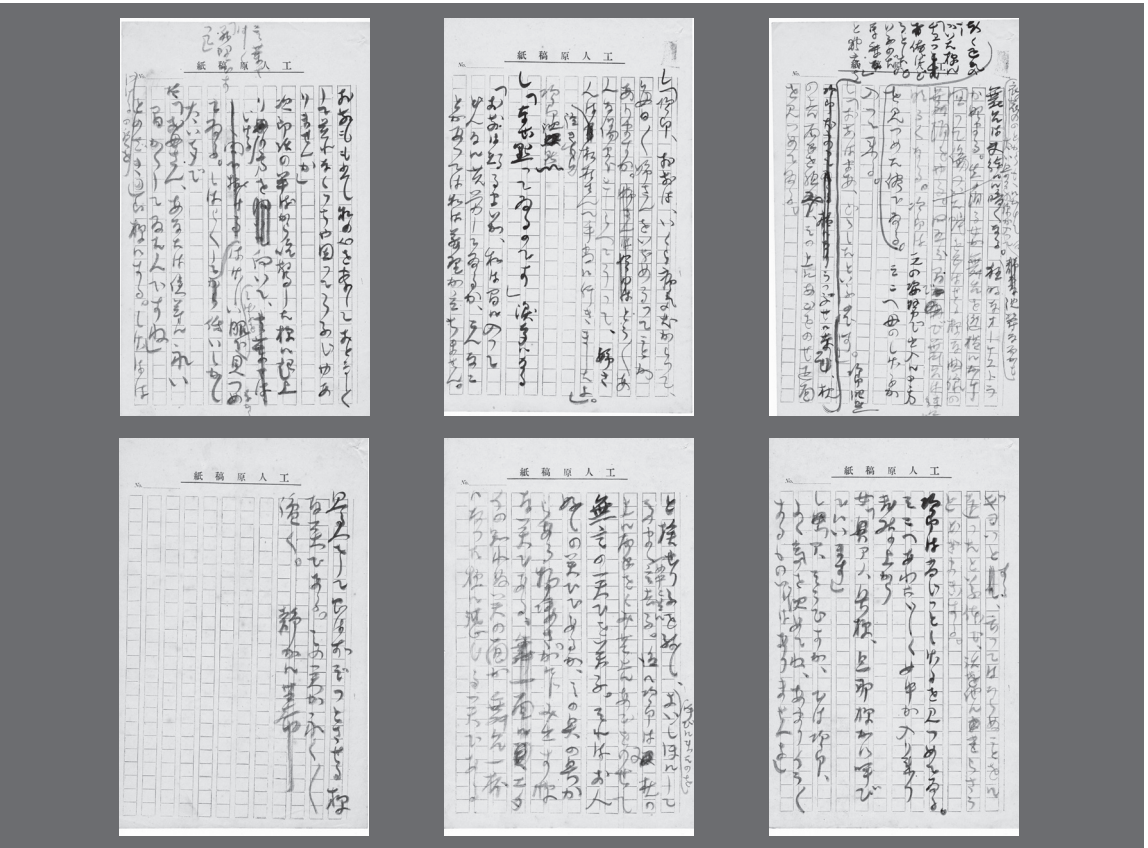
し■「ア、そうですか、では次郎、よく気を沈めてね、あまりうろ／＼する

ものではありませんが

と捨てりふを残し、「呼びに来たのをよ
いしほにしてそのまゝ、一女中と共に
立ち去る。後へ次郎は又枕の上に両
手をくみ其上にあごをのせて無言の笑
ひを笑ふ。それはお人好しの笑ひであ
るか、その奥の奥からある極端さがに
じみ出す様な笑である。「舞一面に」

■エタイの知れぬ笑の面が舞台一杯に
なつた様に感じる笑である。
見る人をして思はずととさせる様な
笑である。その笑が永く〜続く。
静かに幕





編集後記

▽「センター通信」第七号をお届けします。

▽二〇一二年春は土蔵入口の整備が行われました。これによりいまままで特別公開時にのみ開けていた扉を、毎週の一般公開時にも開けられるようになっています。また、従来の金曜に加えて水曜日も公開することになりました。

▽十一月に横浜で開催された第十四回図書館総合展では、「江戸川乱歩『貼雑年譜』の保存処理」と題して、学術調査員の落合教幸が講演をおこないました。

▽『ピブリア古書堂の事件手帖』の著者、三上延氏が取材にいらつしやいました。二〇一三年二月に刊行された第四巻では、乱歩の書籍や原稿をめぐる物語が描かれています。また、フジテレビのドラマにも協力しました。劇中では乱歩蔵書(の複製)なども使用されていたりします。

▽二〇一二年度も書籍や雑誌で取り上

げられました。ぴあMOOK『東京歴史迷宮散策』、「東京人」増刊「豊島区を楽しむ本」、エイムック「池袋本」、などで乱歩邸が紹介されています。また、いしたにまさき『あたらしい書齋』(インプレスジャパン)では土蔵が、伊垣尚人『ノートは友だち! 3』(教育画劇)では「貼雑年譜」が紹介されています。

▽二〇一三年春も乱歩邸は工事を行っています。立教大学六号館に面した南側の塀が生垣になります。また西側の道路に面した塀を新しくします。五月には完了の予定です。(落合)

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
センター通信 第七号

二〇一三年四月一日 発行
編集・発行 立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター

〒一七一八五〇一

東京都豊島区西池袋三―三四―一
電話番号 〇三―三九八五―四六四一
(FAX兼)

E-mail: rampo@grp.rinkyu.ac.jp

開室日

月・水・金曜(公開は水・金)

(十時三十分〜十六時)

資料閲覧には事前予約が必要です。